

自己評価報告書

平成23年3月31日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2012

課題番号：20390542

研究課題名（和文）在宅療養中の疼痛患者の現状調査と痛みの評価、及び疼痛ケアネットワークの構築

研究課題名（英文）Survey of pain patients at home, comprehensive assessment of their pain, and pain care networking for patients and health care professions

研究代表者

深井 喜代子 (FUKAI KIYOKO)

岡山大学・大学院保健学研究科・教授

研究者番号：70104809

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：疼痛看護、非がん疼痛、慢性疼痛、在宅疼痛患者、疼痛ケアネットワーク

1. 研究計画の概要

我が国の在宅療養中の患者の中には痛みを主訴としながらん疼痛患者のような組織的な疼痛管理を受けられず、不必要な慢性痛に苦しむ患者が少なくない。このような患者に対応する専門職者は医療社会の現実の中で疼痛管理に苦慮している。そこで本研究は以下3つの目標を掲げて遂行している。

(1) 我が国の在宅療養中の患者のうち、がん疼痛及び非がん疼痛のある患者の存在割合とその生活実態を明らかにする。

(2) 在宅慢性疼痛患者に起こっている現象を生理・心理・行動など多角的視点で観察・評価する。

(3) 在宅患者の疼痛管理体制を改善するために専門職者からなる疼痛ケアネットワークを構築する。

2. 研究の進捗状況

本研究において現在までに得られた成果は以下のようなものである。

(1) 在宅慢性痛患者の実態について

訪問看護に従事する看護職を対象に行う疼痛患者に関する調査のために、まず全国の

都市・市町村を、そこから事業所をそれぞれ抽出する二段階の確率的抽出方法を採用した(①)。また、在宅患者と比較のために①で抽出した地域から500床以上の大規模病院及び特定機能病院(②)と透析センター(③)を選定(地域ごとにそれぞれ一カ所無作為に抽出)、さらに特殊例として国立ハンセン病患者療養所(後遺障害としての末梢神経痛)④を取り上げた。調査票送付先は①を1,000カ所、②を100病院、③を100施設、④を13施設とした。現在、共通の調査項目を設定するため近隣の施設等で予備調査を行っている。

(2) 在宅慢性疼痛患者の痛みの評価

在宅での患者調査に先立ち、部活動などで慢性的な深部痛をもつ学生を対象に、5種類のアセスメントツールによる痛みの評価と、痛覚定量分析装置及び解析能付心電計を用いた痛み反応検査を行った。現在までに延べ270例のツール評価、並びに26例(痛み種は41)の生理指標検査をそれぞれ実施した。その結果、慢性痛患者の痛覚閾値は高く、痛み増強時に交感神経活性が一過性に高まる

傾向を認めた。これらの試行から、在宅での痛みの評価及び検査手順（マニュアル）が完成した。

(3) 疼痛ケアネットワークの構築

ホームページの開設と、学術集会での看護学研究者・看護実践者との交流集会開催を並行して行ってきた結果、ホームページのアクセス数は漸次増加し、平成 23 年度末で 16,000 を超えた。また、過去 3 年間に日本看護技術学会で開催した交流集会の参加者総数は 120 名に上った。さらに、ホームページのコンテンツのうち、登録制にしている専門職向けページへの登録申し込み者は 39 名に達し、オンラインとオフラインを併用したネットワーク作りが奏功してきた。

3. 現在までの達成度

1. に挙げた目標 (1) 「在宅の慢性疼痛患者の実態の解明」については、本調査を横断的に実施するための時期設定の問題と全対象に共通の質問項目を設けるため予備調査に時間を要したため、③のやや遅れていると評価した。

目標 (2) 「患者の痛みの組織的評価並びに痛み反応の検査」については現地実施に向けて準備が整ったため、また目標 (3) 「疼痛ケアネットワークの構築」についてはネットワーク構築に向けて社会的周知が漸次進んでいると見なし、それぞれ②の概ね順調に進展していると評価した。

4. 今後の研究の推進方策

本研究課題の目標 (1) については、東日本大震災の影響で全国調査は困難と思われるため、調査範囲の再検討が必要である。そのため、平成23年度は西日本地域に絞って本調査を遂行するか、温暖地方・寒冷地方、農村・漁村・市街地・工業地帯などデータが一般化できる地域区分を検討して実施する。その場合でも、可能な限りデータを一般化できるデータをする。

目標 (2) については、当初の計画通り、岡山市内から対象者を選定して実施するほか、

県内の国立療養所でも実施する予定で、ハンセン病後遺障害としても末梢神経痛患者の痛みの実態解明を目指す。

目標 (3) については、これまでの交流実績から、患者や専門職が望む情報を掲載すべく、ホームページを充実させるとともに、学会での交流集会を意見交換の場に発展させていく。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

①深井喜代子、山下睦子、ハンセン病患者の痛み、EB NURSING、8 巻、334-336 (2008)、査読無

②住吉和子、糖尿病神経障害のある患者の痛みと疼痛ケア、EB NURSING、8 巻、50-56 (2008)、査読無

③森貴美、在宅神経難病患者の痛み－筋萎縮性側索硬化症を中心に、EB NURSING、8 巻、58-63、334-336 (2008)、査読無

〔学会発表〕(計 3 件)

①深井喜代子、新見明子、大倉美穂他、痛みのケアの確立を目指して (6) ー痛みのアセスメント技術を再考するー患者はなぜ相談室を訪れるか (交流セッション)、日本看護技術学会第 9 回学術集会、2010 年 10 月 23 日、名古屋市

②深井喜代子、新見明子他、痛みのケアの確立を目指して (5) ー疼痛ケアネットワークで疼痛看護を推進する、日本看護技術学会第 8 回学術集会、2009 年 9 月 26 日、旭川市

③深井喜代子、新見明子他、痛みのケアの確立を目指して (4) ー非がん疼痛に注目する、日本看護技術学会第 7 回学術集会 (交流セッション)、2008 年 9 月 21 日、青森市

〔その他〕

①講演

深井喜代子、ヒトの痛みを問い続けて、第 36 回日本看護研究学会学術集会会長講演、2010 年 8 月 21 日、岡山市

②雑誌特集号企画編集

深井喜代子、非がん疼痛のエビデンス、EB NURSING、8 巻 3 号、10-88 (2008)

③ホームページ

<http://www.totucare.com/>